
甘い香辛料～僕の章～

スコッティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い香辛料〜僕の章〜

【Nコード】

N6031I

【作者名】

スコッティ

【あらすじ】

小高い丘の上に建つ何気無いマンションの屋上に僕はいる。

僕は心地よい風に打たれながら眼下の街を眺めている。

ある日、そこには一人の少女がいた。

僕らの話が始まる予感がしたんだ。

ウソだけど。

第一話・始まりはいつも出会いから・（前書き）

あ、あ、どうかよろしく

第一話・始まりはいつも出会いから・

少し肌寒くなつて街の景観も変わつてゆく、とある11月の放課後のこと。僕は小高い丘の上に建てられた一つのマンションの屋上にいた。そこは街を一望できる程の高さにあつて、眼下には遙か遠くまで街並みが続き、常に強い風が吹いている。そんな場所。その視界を遮るものがない場所で至福の気分になり、タバコを吸いながら読書するのが僕の日課であり、数少ない憩いでもあつたのだが、その日はいつもとは少しばかり違つていた。いや、僕にとっては少しどころではなく、ある一つの事象において決定的なまでにまったくもって異なつていた。要するに何が言いたいのかというところ、そこには先客がいたのだ。その先客について、服装から察するに、まず間違いない女子高生だろうということは理解できたが、しかし、その先客について最も特筆すべき点はそこではない。

その先客——即ちその少女は、息を飲むほどでは事足りず、窒息死してしまうのではないかというほどの美少女だったのだ。……それは言い過ぎだとしても、老若男女問わず全ての人が振り向くであろうほどに彼女は美少女だった。

僕はそこに立ち尽くし、加えていたタバコも落として、ただその美少女に見とれていた。彼女は彼女でこちらに気付いている様子もなく、街を眺めているように思えた。しかし、そんな状況も十数秒も経てばさすがに冷静に頭を働かせようという発想に至るものだ。もっとも僕のつたない脳ミソではせいぜいのところ、迷子なのかなという結論にしか至らなかつただけれども。……もちろんだが、それはウソだ。

やはり、そんなことを考えていても埒があかないと思ひ立て、直接、本人に聞くことにしたのだけど、そもそも極度な人見知りにそ

んな冒険をできるわけがない事を忘れていたことに気が付いた。

僕は諦めて、素直に家路に着くことにした。しかし、後ろを向いて歩いて行こうとしたところで向こうの方から声をかけてきた。どうやら、僕の予想に反して、こちらのことに気付いていたようだった。

「私はここ、初めてなのだけれど、いいところね」

その声はその解放的な場所で、しかもそれなりに距離の離れている僕のところにはまではつきりと響いた。それでも、僕としてはいきなり話しかけられたことに驚きを隠せず、また、持ち前の人見知りとしての本性がそのまま声に出てしまった。

「ふぁ？は、はい」

死にたい。率直にそう思った。

しかし、彼女は僕のそのような反応は元よりよそうしていたのかのごとく、無視をした。もっとも、後から考えれば単純に相手の元手で声が届いていなかったに過ぎなく、ただ反応の仕方が分からなかっただけなのだろうけど、その時の僕にはそんな明解な事すら思考するに至らないほど混乱していたのだ。彼女はさらに言葉を紡いだ。

「うん、ここは本当にいいところだ。君はよくここに来ているみたいだけど、わたしもまたここに来て構わないかな？」

そう言っただけで彼女は僕の方に体を向けた。僕は彼女のその女性らしく美しい顔立ちに魅了されながらも、その問いに答えた。その言葉が後の僕らの話に急速なまでの変化をもたらすことになることなどつゆしらず、

ただただ僕は返事を返した。珍しくはつきりとした口調で。

「僕は別段かまいませんよ。ただ、これからいつそう寒くなってくるでしょうね」

”今になって考えたらさ、マンションの屋上が最初の出会いっていいのはなかなかおかしな話だよな。そう思うだろう、花蓮”

第一話・始まりはいつも出会いから・（後書き）

なんだか 文が ぎこちない・・・

難しいですね、小説を書くって。

精進していきます。

第二話・どうしようもなく平凡・（前書き）

主人公を取り巻く世界の説明みたいなお話の回です。大雑把ですけど。

第二話・どうしようもなく平凡・

どすっ！

僕、熊谷海人はいたって普通の高校生だ。

ルックス、頭、運動能力から何から何までが平均値をとるという記録は、いつそ奇跡と称してもいいぐらいだと友人から言われた経験もあるほどだ。

しかし、僕はそれについて昔からつらい思いをしてきた。その思いの直接的な原因は兄の存在にある。

なぜなら兄は世間一般にいういわゆる天才だったからだ。兄の数々の武勇伝を挙げだしたらきりが無い。たとえば、学生時代に所属していたバスケット部においてはキャプテンとしてチームを全国大会に導いたりだとか、最近のことというところ今年春、京都にある全国屈指学力を誇るみんなの憧れK大学に首席で入学したこととか。そして僕はその出来のいい兄と比べられることに耐えられなかった。親や近隣の人たち、あるいは友人たちにことあるごとにあれやこれや言われることが氣にくわなつたのだ。とはいっても、僕自身は兄のことが嫌いなわけではないし、純粋に兄の人柄に憧れる部分もある。そこは分かって欲しい。

兄弟といえば僕には妹もいるのだが、まだ小学4年生なのでポテンシャルがどうこう言うのはよしておいて、そもそもその妹に対し今まさに言うことがあるのだ。

「う、うう・・・も、もう少し、し、やさしく、お、おこしては、くれないか・・・星香^{ほしか}」

11月11日金曜日朝6時33分、僕は腹部にもろに受けた強烈な

一撃によって目を覚ました。さっきの鈍い音はその際に発したものだ。
ベットのうえのたうちまわっている僕に星香と呼ばれた少女はいつた。

「おにちゃんがいつまでたっても起きてこないからでしょ。因果応報よ」

僕はその言葉を聞きながら少しずつ落ち着きをとり戻してゆく。

「はあはあ、ひどいな・・・とりあえず、おはよう」

「はい、おはよう。朝ごはんできてるからはやくきてね」

星香はそういうと早足に部屋を出て行ってしまった。

僕はその姿を見送って、痛むお腹をさすりながら制服に着替えた。そのまま居間の方まで行くといい匂いがした。見てみるといかにもな洋食が皿に盛りつけてあったので、僕の食欲がそられるかのようになに思われたが、いかんせん、先ほど妹に殴られたお腹の調子がまだ完璧ではなかったのだなんだか損をした気分になった。

食卓にはすでに家族がそろっており僕が一番最後に席に着く形になった。

一番最初に口を開いたのは母だった。

「あつ、そうそう言い忘れてたわ、海人。私たち今日から三日間旅行に行ってくるから、お留守番お願いしていい？」

それはまた随分と急な話だったが、不都合があるわけではなかったので二つ返事でその役目を引き受けた。

そのあとは特にこれといった事があるわけもなく、定時に家を出て、定時に電車に乗り、少し飛んで定時に放課後を迎えた。放課後だからといってやはり僕には特別やることもなく、そのまま帰ろうかと思っていた時に後ろから声をかけられた。

「なあ海人、今日暇か？」

その声の主の方を向くと、そこには風間俊之^{かざまとしゆき}立っていた。僕はその御誘いを快く受け入れた。暇なので。

”僕の生まれ育ったところは退屈だったけど、やっぱり平凡っていうのはなかなかどうしていいものだったんだなって、なんで気付かなかったんだろうな。そんなことを今になって思うよ。”

第二話・どうしようもなく平凡・（後書き）

ここから！ここからですよ、面白くなっていくのは！

・・・いや、まだかな？

第三話・やっぱりラーメンは美味しかった・（前書き）

話は進みません。

第三話・やっぱりラーメンは美味しかった・

学校を出て橋を渡り、高架下を抜けて街に入った。

街ではちらほらと同じ学校の生徒を見かけた。

風間は入り組んだ裏道を早足に進み、少し行ったところで歩みをとめた。

目の前にはボロ屋があり、よく見ると上の方にラーメンと書かれていた。

「ここ、俺の気に入りなんだ。」

風間が言ったが、僕は返事を返さなかった。

多少抵抗を感じながら、風間について店の中に入ると、店内は電気が付いておらず薄暗く不気味な雰囲気を漂わせていた。普段なら間違っても入らないような場所だったが店内はそれなりに賑わっていることが、僕には奇妙に感じられた。

しかしそんな僕の思考を遮るかのようにそいつはいた。そこにはなんと、先日どこぞのマンションの屋上で出会ったあの少女が、豪快にラーメンをすすっていたのだ。

ずずずつと小気味いい音を立てながらを麺を啜る少女を横目に僕はカウンター席に座った。

ちらちらと目をやっているあたり、やはり風間もその少女のことが気にかかっているようだった。しばらくその状態だったのだが体格のいい白髪交じりの店主に不機嫌そうな顔をされて風間にお勧めされたねぎラーメンを注文した。

ねぎラーメンが出てくる間に小声で風間が言った。

「お、おい、あの子・・・」

最後まで言い切らなかったが言いたいことはしっかり伝わった。

「うん、かわいい子だな」

「おいおいおい、なんだか素っ気ないなあ。お前ちゃんと見てんのか？あんなにかわいい子そういないぞ」

それにしても美少女がラーメンにがつついていてという光景は、何となく情緒を感じるなあ。

なんてことをかんがえていると風間がさらに言葉を紡いだ。

「長い黒髪に雪のように白い肌、大きめな瞳、美しい鼻のラインとそれらすべてを引き立てる凛々しい輪郭。細身の体にこぶりな胸。そしてなによりあのきをてらうことのなく、爽快なまでにすがすがしい食いつぶり。たまらねえ・・・」

そういつてじゅるりと舌なめずりをする風間を見て、なんだか気味が悪いな、妙な性癖もってそうだななんて思っていたところに、僕らの目の前にどんっとラーメンが置かれた。おいしそうな匂いにひかれてさっそく食べてみると、なるほど、風間が気に入るのも納得の味だった。なかなかおいしいという旨を伝えようと思い、風間の方を見やったら、うめえを連呼しながらラーメンに食いついていたので、僕も食べるのに集中することにした。お互いしばらく無言のままラーメンを食べていると、ふいにその彼女の声が聞こえたので、僕はなんとなしに、視線を向けた。

「ごちそうさま。はい、これ。」

言って、差し出した彼女の手のひらにはラーメンのお代が握られていた。

しかし、店主はそれを制止し、いった。

「おっと、可愛い嬢ちゃんから金をもらうわけにはいかねえや。そのお金で親孝行でもしてやんな。」

少女はその言葉に驚いた顔を見せたあと、直ぐに笑顔を見せた。

「それじゃあお言葉に甘えさせていただきます」

彼女はそう言って立ち上がると店主に一礼してから、ピンとした姿勢で歩き出し、店を後にした。

気づいていたかいなか、その間彼女は店中の視線を独り占めしていた。

数十分が経った頃、僕らも店を出た（もちろん、お金は払った。）。

「ぶっはー、くったくった。見ろよこの腹。パンパンだぜ。いいもんも見れたし今日はついてんのかな、俺。最高の気分だぜ、ヒャーハァー!!!」

僕は腹を丸出しにして、パンパン叩きながら言った。……
・わかってるとおもうけどウソです。

「たしかに、結構量あったからな。満腹だわ。」

これが本当の僕のセリフだ。一息ついてから風間は言った。

「ところで、これからよって行きたいところあるか」

「いや、ないよ」

「んじゃ、帰るか」

僕はラーメン屋で見たあの名前のわからない少女の話などをしてながら家路についた。

”ここから帰ったら、またあのラーメン屋に行こう。

そこからさらに一拍あけて僕は言った

いいだろ、それくらい夢見たって”

第三話・やっぱりラーメンは美味しかった・（後書き）

風間に乞うご期待

第四話・遠退く世界・

「やあ、久しぶりだね」

屋上の上には二人の人間がいた。勿論、僕と黒髪の美少女だ。彼女に、僕は言葉を返した。

「ひさしぶりって、さっきラーメン屋で会ったじゃないか。」

僕は懷から煙草とりだし、口に咥えながらライターをとり出した。気味のいい音をたてライターの蓋をあけ、煙草に火をつける。一服しながら、そういえば僕はこの子には人見知りしないなと思った。彼女は言った。

「そういえばまだ名前言ってなかったよね。花蓮、篠崎花蓮って言うの、私。よろしくね。」

「僕は熊谷海人。ところで君はどここの高校に通っているのかな。僕、ここの辺の制服には詳しいんだけど、その制服は見たことがないな。」

「ああ、これは自分で作ったの。」

「え、どういうこと?」

「私学校に行っていないから、気分だけでも思っただけ。」

なんとなくこれ以上の詮索はまずいなと思ったから、適当に相槌を打って話題を変えることにした。

「そつか。なんか大変そうだな。それにしてもあそこのラーメンおいしかったな」

話題の变え方が少し無理やりすぎた気がした。やっぱり会話のスキルが足りないのかな。それでも彼女は、僕の無茶な振りにしっかりついてきてくれた。

「そうね、でもまだお箸の使いに慣れてなくて、食べずらかったのが残念だったわ。」

「ん、もしかして外国の方？どこ出身なの？」

僕のそのなんともない問いに彼女はなにかしらの覚悟をきめたような、鋭いような顔をした。……………気がした。

「出身……か。すべての原因は私にあるんだから答えなくちゃね。でもあなたは私これから言うことを信じてくれるかしら？」

意味深なその返しに、もしかしたら彼女は電波さんなのかもしれないという危惧をしながら、僕は微妙な首肯をした。つまりそれは、あんまりにも突拍子のないものなら信用するに値しない可能性を秘めているということだった。

そして彼女はあんまりにも突拍子のないことをいった。

「私、この世界の住人じゃないの」

もちろん信じられるわけもなく、僕はよほどずっとボケたな顔をしたのだろう、彼女はやっぱりという顔をして口を尖らせて言った。それにしてもこの子、顔の変化が顕著だった。

「ほらね、やっぱり信じてくれない。でもね、直ぐに分かると思うよ。」

僕はそこでその会話を区切って、屋上の淵の方ぎりぎりまで近づいた。

そして街に向けて指さして、彼女に向けて言った。

「ほら、見て。あそこが僕の通った小学校で、あっちが中学校。高校はさすがに見えないね。」

「え、え？」

当然彼女は混乱したようだった。が、僕は構わず続けた。

「僕はね、ずっとむかしからこの街に住んでいるけど、それなりに今までの生活には満足しているんだ。死ぬまで平穩に過ごしていきたいってのが僕の夢なんだ。」

「ちょ、ちょっと待って。一体何の話をしているの？死ぬだのなんだのって……」

「なにが言いたいのかって、ようするに、今僕はものすごく嫌な予感がしているんだ。僕の人生の根底を覆すような。鳥肌が立っているんだ。こんな不安、僕の人生には必要だなんだよ、花蓮。」

花蓮は言った。

「……もうすぐここ一帯のひとが消滅するわ、いえ、より具体的に言うならはあっち側の世界に送られることになるの。すべて私の

せいでね。だから、ごめんなさい、あなたたちを巻き込んでしまつて。」

刹那、空に奇怪な文様が浮かび上がった。それが七色の光を放ち街を照らす。

光に包まれ、静寂した世界。

混沌カオスに引き込まれながら、一人、また一人と街から人が消えて行く。人々はまるで、そこに理想の世界を見出したかのような、至福の笑みで空を仰いでいたが、彼女だけは悲しそうだった。

第五話・異世界風味・

「グルルルル」

やわらかい草の香りがした。

目覚めた僕はどうかやら寝た状態になっているようだった。

目を開くと木々から溢れる木洩れ日に思わず目を細めてしまう。

「グルルルル」

体を起こそうと思ったが、なかなか思うように肢体が上がらない。体がやけに重かった。

「グルルルル」

どうしたものかと体を触れてみると、なにやら硬い物に触れた。

思いつきり力を込めて腰だけ浮かして、座った状態になり、そこでようやく、体が重い原因や硬い物体の正体について分かった。

僕は鎧を着ていた。

それだけじゃない、腰に剣を携えていた。

「グルルルル」

なんとなしにその剣を鞘から抜き、頭上に掲げてみたが、ずっしりとした重みが僕の腕を蝕んだだけだった。

「グルルルル」

ところで、さっきからやたらと聞こえてくる人ならざるものの声に

ついて、それに気付いた僕は焦って再びねっころがり、死んだふりをした。が、勿論そんな子供だましが通用するわけもなく、そいつはダラダラと涎を垂らしながらこちらに近寄ってきた。そいつは犬のような姿をしていたが、犬ではなかった。一角の角が生えていた。

「グルルルル」

尚も死んだフリをしながら僕は思った。

———どうしたもんかな…

少しずつ縮まっていく僕と異形の生き物との距離。
その時だった。

バシヤツ

何やら水のようなものをかけられた、いや、ぶっかけられた。
しかもその液体、ものすごく臭かった。

「ブツハア、な、なんだこれ！な…くっさあ！」

思わず僕は叫んでしまった。しかしその匂いのせいか、僕に近づいてきたその生き物は驚いて、走ってどこかに消えていった。

とりあえず目下の危機を回避したことに安堵したわけだが…さて、目の前に立っている人物にはどう対処すべきか。
僕は重たく臭い体で立ち上がり、言った。

「た、助けてくれて、どうもありがとうございます」

僕はここに来て致命的なことを思い出した。

——僕、人見知りじゃん。最後の方とか自分にも聞こえないぐらい小さな声だったし…。

案の定、聞こえていないのか、その長身の青年は大きな弓を片手に持ち、こちらを見据えてなにも言わずに立っていた。

僕は視線を相手の足下に落とした。弓を持っていることに気圧されただけではない。ただ、目を合わせるといふ行為が僕にはしんどかっただけだ。

沈黙と匂いだけが、その場に立ち込めた。

——すごく気まずい。この状況、どうしようか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

先に口を開いたのは幸いなことに向こうからだった。

「付いてこい」

彼はそう言って、くるりと背を向けたかともうと、そのまま歩き出した。

見ず知らずの人についてこいと言われてついて行くほど僕は人を信じているわけではないが、彼の僕を助けたという事実を考慮して、僕は彼の後を付いて行った。頭の回転だけは冷静だった

着いた先は小さな村だった。

一見普通の村だったが、僕はそもそもその普通の村を見たことがないので、何とも言い難かった。しかしそれゆえに、新鮮ではあった。

どことなく僕らの過ごしてきた世界とは違う雰囲気気づく。
彼女の言っていた言葉を思い出した。

村の人に奇妙な目でみられながら、進んでいく。

かなり歩いて、目算だが、村の中心当たりにまで来たところで彼は足をとめた。僕も足をとめた。

「入れ」

彼が言った。

その建物はまわりの家々と比べると若干、大きかった。

僕もだが、この人もかなり口数が少ないなと思った。ここまで来る中で一言も会話を交わしていない訳だし。

僕は言われるままにその建物に入って行った。

中は僕の見てきたごくありふれたの一般家庭とは異なり、かなり時代的なものを感じた。つまり、これは僕の勝手な偏見だが、ひと昔前の西洋の、不自由なく暮すことのできた家がこのような雰囲気ではないだろうかと思った。

紙がうず高く積み上げられた机の向こうに姿を現していた人物は、初老の老人だったが、その体は、そこいらにいる中途半端に体を鍛えている人たちのそれとは違い、屈強そのものだった。

僕をここまで連れてきてくれた彼は言った。

「ラディル町長、トキサの森にいた不審者を連れてきました」

その人が町長と呼ばれたところを聞くと、どうやら僕は村と町の定義をよく理解していなかったようだった。そこら辺のなんやかんやは、なかなか難しいものだ。

いやしかしそんなことはこの際どうでもいい。そんなことよりも僕

はどうやら不審者扱らしいった。そっちのほうが問題だ。
一体どうしたものか。

村長ラディルが言った。いや、町長だったか。

「お前、くさいな」

いきなりの失礼な言葉に僕はあることに気づかされることとなった。
ああ。ああ、そうだったのか。だからなのか。心なしか町の人たちの視線が冷たかったその理由は。

まさにこれこそ、一体どうしたものかだった。

しかし、これについてはすぐに解決することとなった。

「とりあえず話はお前のその匂いが取れてからだ。おいカイン、そいつを宿屋に連れてけ。金は俺につけておけばいい。」

町長はそう言い放った。

寡黙のその人、カインに連れられて、僕は早くも町長の家を出た。

いやしかし、本当に早かった。最悪な第一印象だったろう。

宿屋はすぐそばだった。どのくらいすぐかと言うと、その家を出てすぐ目の前の建物だった。

宿屋の主人に、やはり怪訝な顔をされながら、なんとか受付を済ませ、部屋まで案内される。その間僕は、気を使っずと一番後ろを歩いていた。

部屋につくと、カインは夕飯を食べてからまた町長の家にかいと言っ
って宿を出て行った。

カインと町長のやり取りのどこにそのようなことを伝える会話があったのかと思いつながら部屋に入って行き、そもそも僕は不審者扱いだったはずなのだが、待遇が良すぎるなあと思いつながら体を洗い、少し考えてから鎧も洗った。

そこまでやり終えるとなることがなくなり、ベットに横になった。
そして、そのまま夢の世界へ飛んで行ってしまった。

第五話・異世界風味・（後書き）

・
・
・
・

第六話・危機・（前書き）

更新遅れてごめんなさいっ

第六話・危機

コンコンという音で目が覚めた。
目を開くと扉の向こうから声が聞こえた。

「ご飯が出来上がりましたので、食堂までお越しく下さい。」

宿屋の主人の声のように思えたが、そんなことはどうでもよかった。
柔らかなベッドから降りて服を着ようとしたところで気が付いた。
今の僕には鎧しか着るものが無かった。

仕方がないので、裸のまま鎧を着た。冷たく、着心地は悪かったが
しかたがないだろう。そのままカウンター横の扉から通じている食
堂へ向かう。食堂は僕の他に数人しかおらず、その広い空間はやけ
に寒々としていた。

—— もっとも、僕は騒がしいより人の少ない方が好きだけだね

指定された席に座ると目の前にはすでに、料理が展開されていた。
ご飯を食べながらも一度回りを見渡してみると、どうも一人身の
人が多く、話している人たちは極少数だと気付いた。しかし、それ
はだからどうしたと言う部類に属しているわけで、それよりも問題
なのは目の前の見たことのない動物の丸焼きをどうするかだった。
いや、コイツはさっき見た犬型の生き物の丸焼きか…

「なんて量だ…」

思わず呟いてしまうほどだった。

勇気を振り絞って、一口食べてみた。
すると、

「うまい…」

予想外だった。犬を食べていると思わなければ、いくらでもいけた。僕はそうして数十分の内に全てたえらげてしまった。

その後一旦部屋に戻り、食休みをしてから町長ラディルの家に向かった。

町長の家の扉をあけるとそこには相変わらずの様子で町長がいて、その隣にはカインが立っていた。仕事に向かいながら片手間に言った。

「よく来たな」

僕は曖昧にどうもと頷いた。

「ちつとはよた話でもしたいんだけどな、なにぶん、多忙でな手短に話させてもらおう」

するとラディルは僕を一瞬だけ見てから、さらに続ける。
ラディルの言葉は僕の不意を突くものだった。

「お前、日本人って奴か？」

言っている意味がわからなかった。と言うよりも、当たり前すぎなことを言われて、反応の取り方がわからなかったというほうが正しいだろう。何を言っているんだと思いつつも僕は、冴えない返事をした。

「はあ、まあそうですね」

「やはりそうか。ここ数年いや、数十年世界中で突然何処からとも

なく人が“出沒”してな、そいつらを問い詰めると、最終的には、皆一様に自らの事を日本人と称しているんだ。予感はしていたが、まさか本当にお前がそうだとはな……」

そう言った後、完全に僕の方を見て、問い詰めてきた。

その目におびえたような、弱弱しさを感じさせる揺らぎがあったことを僕は偶然見てしまった。あつてまもないが、彼のその表情は、らしくないというか、なんとも不思議な感じがした。

「なあ、教えてくれ。日本人とはいったいなんなんだ」

人が“出沒”という表現に違和感を感じながら僕は考えた。あの時僕らの街は光に包まれた。その光に晒さらされ、騙だまされ、飲み込まれた街の人々。おそらくだが、あの街にいた人たちは皆この世界に來ているのだらう。

（ここが異世界だと理解するぐらいはことは僕にもできた。このラディル町長治める町の人々の衣や、食、住、さらには見たことのないような生き物の存在など、なんとなくだが地球外じみていた。動揺はしない。心がそれを受け入れていたから。）

だとすれば、その人たちは一体今、どこへいるのだろうか。僕はいち早くこの街に保護（？）されたからいいものの、もしも僕と違って、助けが得られない状況の中”出沒”してしまったら？

僕

の家族は？

それはラディルの質問に対する答えではなかった。

そして、何の因果か、脳裏にちらつくのは、あの花蓮とかいう美少女のことだった。

結局、ラディルの問いに対する答えが導き出せず、長い沈黙が流れた。

口を開いたのはラディルだった。

「答えない、か。それもまたいいか。では話を変えよう。」

僕は答えられ無かったことに若干申し訳なさを感じながら、次に出る言葉を待った。

「俺はお前を捕まえなきゃならないんだ」

・・・！！？

僕はあまりにいきなりな言葉に一瞬間をおいてから、たじろぐ。

「え・・・一体どういう・・・」

ラディルは答える。

「まあなに、そんなに焦ることはない。お前が捕まるかどうかはお前次第だ。だから、とりあえず、今は俺の話を聞け。」

一体何が何だかわからない僕の脳はひとまず、ラディルの話を聞くという方針をとることにした・・・のだが。

「いや、まで。俺が説明しようとも、お前そもそもセルジューク帝国すら知らないんじゃないのか・・・」

もちろん、そんな名前を聞いた覚えなんかあるはずのない僕は首肯した。すると、ラディルは落胆した様子で手元の君の束に目をもどしながら、カインにセルジューク帝国についての説明をさせた。

カインは一度小さくため息を吐きつつセルジューク帝国についてを話し始めた。

さっきの恐怖に似た動揺に反して、今度は僕は少しだけセンチな気分になった。

「セルジューク帝国はこの星、セレモニーデバイスにおける最大にして最強の国だ。広い広いこのセレモニーデバイスを統治している。人口は三千万。人々は理想の国と呼んでいる。現国王はフィール・デル・セルジューク七世。彼の政治的な活動、実績は歴代最高とまで言われていてね、実はこの、ラディル町長とも何度か会っているんだ。なぜこんな片田舎の町長と一国の王がなんかいもあっているのかというとな、実はこのラディル町長40年前にあつたあの――」

「カイン、話がずれているぞ」

寡黙なキャラだと思っていたカインが饒舌に話し始めたかと思うと、いきなり話がずれ始めたところをラディルがさえぎる。話の続きを聞きたいところだった。

「つたく、こっちは忙しいんだよ。まあ、今の説明で大体わかったら。」

「はあ、まあだいたい」

「で、だ。お前ら日本人に国民が動揺していてな。その国の騎士団、まあ治安維持にあたっている帝国直属の集団組織だな。そいつらが日本人の捕獲にあたっている。わかるよな、俺はこれでもこの町仕切ってたんだ。」

第六話・危機・（後書き）

ごめんなさい。

ずっとゲームやってました。

ヴェスペリアとかね、FF13とかね・・・。

おもしろかったです

第七話・町のこと・

すっかり暗くなって宿に戻る。手にはラディルからもらった質素なリにもしつかりした素材だろう手触りの洋服を持っていた。部屋に入り、重たい鎧を脱いで、それに着替えるとベッドに仰向けで横になった。体がずぶずぶと沈んでいく感覚が心地よい。

「はあ……。」

思わすため息が出てしまった。しかし、これ幸せを感じた時のため息ではなく悩みを抱えたときのそれだ。優柔不断な僕にラディルが選択肢を与えたためだ。先刻の出来事を思い出す。あの後、ラディルはいったのだ、『だが』と。

『だが、俺は意味も分からず人を売ったりはしたくない。そこでだ、お前を俺のところで雇ってやってもいい。』

と言っても、もう空気がないからな、食料調達係りになっちまうけど、それでも豚箱に入れられるよりはいいだろ。』

通常で考えれば迷わず雇われると考えるのかもしれないが、ここが異世界なのならば僕らがこっちに来たように、戻る方法があるのではないか。そう考えると、一刻も早く元の世界に戻りたいと思う。もっとも何の情報も無しにどうこうできる問題ではないから、やはり、雇ってもらえないのだろう。

とか考えているとさっき眠っていたはずなのに、また眠気が襲ってきたので、目をつむるとすぐに眠ってしまった。

翌朝、目覚めたのは意外にもまだ早朝だった。風呂場へ行き、食事を済ませて、さらに食休みをしてから、町長の所へ行こう、という

算段を立てて、その通りにした。ラディルは直ぐに許可をくれた。

「それじゃあ、早速が行ってくれ、カイン！」

そう言つてカインを呼ぶ。

カインは嫌な顔をせず、こちらを向いた。

「ついてこい」

おとなしく後を着けていくと、物騒な武器や、鎧の類いのものが所せましといわんばかりに置かれていた。

なんだか妙な流れだぞ？

僕は思った。

「これだ」

カインは無愛想に言つて、棒状の何かを投げる。

その質量に思わず落としてしまった。

剣だった。それも、ただの剣ではない。日本刀だった。

それを拾いあげて、格好をつけているわけではないが、肩にのせる。カイン自身は槍を手にとっていた。

「着いてこい」

日本刀の位置を変えながら、周りから奇異な目を向けながらカインの後をつけてく。ふいに、恰幅のいいオバサンに話し掛けられた。

「あら、カインちゃん、食糧調達？ご苦労ね。そっちの子は？」

食糧調達…まさか狩人的なサバイバル食糧調達なんてしないって信

じてる。

「こいつは…旅の流浪人です」

言った後に、しまったという風に顔を背けたのは、おおよそ僕の恰好が旅人のそれとかけ離れていたからだろう。

にしても、この世界には旅人がいるのか。

「そうかい、旅人かい。たまには親元にも帰ってやんなさいよ。心配してると思うから。それじゃ、私も急いでるから、これで。町長によろしくね。」

僕らの脇を通り抜けていくおばさんに軽く会釈してから、歩き出す。

ずいぶん長い間歩いたと思ったら、すでに家はなく、僕らは森の中にいた。

「一体どこまで」

と、僕が言つと、

「ここでもいいか」

と、カインが言った。

するとタイミング良くそばの茂みの中から、兎によく似た小さい動物が出てきた。

何をするのかはわかっていた。

カインはひと思いにそいつを一貫した。

別に動物虐待がいやだったわけではないが、僕は空を見上げた。

その後僕はいやいやながら三匹の小動物を殺した。

「なんで日本刀・・・」

そう呟いたのは、ベッドで疲れをいやしている時だった。

第七話・町のこと・（後書き）

話を進めるには強引さが必要ですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6031i/>

甘い香辛料～僕の章～

2010年10月11日02時42分発行